

義太夫

義太夫協会会報
第67号

平成10年8月15日
社団法人 義太夫協会 発行
〒104-0045 東京都中央区
築地1-13-5 松竹会館内
TEL (3541) 5471
FAX (3541) 5471

心機一転を期して

社団法人義太夫協会会長

景 山 正 隆

早いもので、私が社団法人義太夫協会の三代目の会長に就任してから任期の三年が経ちました。六月下旬に開かれた総会で役員の改選が行なわれましたが、今期も、私が引き続き会長を勤めさせていただくことになりました。会員の皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

副会長も、前期と同様に竹本朝重さんと竹本駒之助さんに引き続きお願いすることになりました。理事も若干の入れ替わりがあったものの、全般に殆ど代り映えのしない陣容ですが、義太夫協会の現況からすれば、これは自然の成り行きではないかと思えます。

協会の主たる事業である、毎月の国立劇場演芸場における「女流義太夫演奏会」も、順風満帆とまではゆかずとも、中堅若手の進境に著しいものがあり、今後の精進と活動に大いに期待が掛けられます。さらに、この度、協会理事の鶴澤友路さんが国の重要無形文化財保持者の認定を受けられたことは、女流義太夫の振興のために大いに励みとしなければなりません。普及活動の「義太夫教室」も、今年には第五十一期生三十数名を迎えて順調に開講しました。一つの市民講座が半世紀に亘り毎年続けられてきたということは並大抵のことではありません。また、今度の総会で、

竹本弥乃太夫さんから、男性の正会員を増やしたいという提言がなされましたが、私も全く同感です。私は、「会報第65号」（平成九年八月一日発行）に「現在義太夫協会の正会員は、男性二六名（竹本二四名・竹本以外二名）、女性六〇名、合計八六名となっています」と書きました。義太夫協会の源流はいうまでもなく男性ばかりの江戸因講で、竹本を含む男性の二六名が、その伝統の継承者ということになります。竹本以外の方が僅か二名というのは、深刻な問題として受けとめなければなりません。弥乃太夫さんが提言された課題に積極的に取り組まなければならぬ所以です。以上のように見えてきますと、今は、義太夫協会の歴史において大きな節目の時に当たっているのではないかと思います。

以上に記したような協会の大きな節目の時機に当面して、現今のような伝統芸能を取り巻く社会環境の厳しい中で、「女流義太夫演奏会」や「義太夫教室」が続けられる意義とあり方を改めて問い直すと共に、その他の協会の活動についても思いを致し、協会の一層の発展を期して、心機一転を図りたいものです。



八十数年の人生すべてが義太夫だから、私のどこを切ったって浄瑠璃以外の何も出てこない、と笑っておっしゃる。いつもにこにことしていらして、鼻歌をうたっている時もあります。これももちろん義太夫でした。

「芸歴」

四歳で義太夫を始める。十二歳のとき大阪へ出て野澤吉童門下となり、四年間の内弟子を経て豊澤広助（松葉屋広助）に師事。語りや竹本東広に習い、竹本君香と名乗る。淡路へ帰り修業の後、昭和十一年より鶴澤友次郎の内弟子となる。昭和十六年鶴澤友次郎の名を許される。昭和二十六年友次郎死去の後野澤吉弥、竹本綱大夫、鶴澤寛治に師事。昭和二十六年竹本染登の相三味線となる。淡路人形浄瑠璃の内容を充実させ、世界に広く紹介した功績は高く評価される。文化庁長官表彰、ポラ文化賞ほか多数受賞。

苦節四年！

悲願の労作堂々刊行！

前号でお知らせしました、義太夫協会元事務局長職員水野悠子さんの著書「娘義太夫」が中公新書より刊行されました。新聞・雑誌でも取り上げられ、大いに話題になっています。

その「娘義太夫」は、めんめんと現在の私たちに受け継がれています。女流義太夫を身近なものとしてより深く理解して頂きたい、という著者の熱い思いが伝わってくる労作です。

水野悠子さんの新しい出発

池田弘一

水野悠子さんの中公新書「娘義太夫」は予想を上回る多くの新聞・機関誌にとりあげられ、書評・紹介でたたえられた。実にねたましいほどの評判である。そして、その評の表題の多くは、「娘義太夫」の前に二行に割ってつけてある「知られざる芸能史」、「娘義太夫」の下にある「スキャンダルと文化のあいだ」の評としては適切と考えられる。しかし、水野さんがほんとうに伝えたかったことは、二つの傍題だけでは明らかにできないのではないかと思う。それでは著者がほんとうに伝えておかなければならないと考えつづけていたことは何か。私にもまだ読みきれていない。

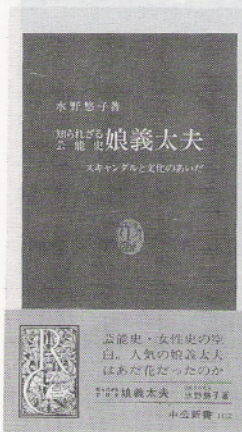
この出版の実現は容易なことではなかった。稿を進めることの困難以上に、世に出すという決意をし、それを実践するということの苦難に負けなかったことに頭を下げる。多くの人の協力に感謝するところがあるが、水野さんの身になって骨を折った人がどれほどいたろうか。

もちろん私も知らん顔をしていた一人だ。よくまあ出たと思う。それが実感だ。

労作の論述について、内容について何か言うほど私は「娘義太夫」も知らなければ、「女流義太夫」も知らない。ただ、この本にいいかげんはないと信じて、女流義太夫の人、客の表も裏も知りぬいて、協会と苦勞を共にすること二十年という人が世に問うた本だ。会員は、特に若手の人は基本的な知識を得るためだけでもよいから読むべきである。「私ならもっと詳しく知っているわよ」など言わないでベテランも読んでほしい。この本を読むと明日を思い、前進せざるを得ない気力がわいてくるはずだ。

そして、水野さん自身は書きつづけるべきだ。日々遠くなる戦後五十年と今日と明日とを。書いたものが出版できたことは、いま新しく出発することを意味する。それは宿命である。女流義太夫そのものを知っているからこそ書ける、そういうものを書き続けるべきだ。女流義太夫そのものが求めている。世も求めている。

平成十年十二月十二日(土)、中野区立歴史民俗資料館に開催される芸能学会(会長三隅治雄)の研究大会で、水野さんは著書をひっさげて発表をする。縁ある方々の御来聴をお願いする。



竹本土佐廣師、竹本綾之助師 七回忌を偲ぶ

平成四年春三代目竹本綾之助師、又七月終りに人間国宝竹本土佐廣師という巨星二人を失って六年余り、その後女流義太夫の世代交替も著しくなりました。両師が義太夫を体で伝え、守られてきた志を継ぎ、一層の精進に勤めております。

七回忌にあたり、ゆかりの方々に思い出などをお寄せ頂きました。懐かしい写真も御覧下さい。



故竹本綾之助



故竹本土佐廣

なお、お二人を偲ぶ会（仮題）を十二月十一日に東京証券会館ホールに於て催します。



左=土佐廣 右=朝重

土佐廣御師匠様の七回忌に

七年前の夏の盛り、国立劇場研修の授業を終えての帰途、地下鉄半蔵門線の電車の扉が開きました。渋谷で下車の私が降りようとしたのと土佐廣御師匠様のお嬢様が乗って来られたの同時でした。ただならぬ御様子が見てとれました。そのまま長津田の病院迄御一緒に、そして御師匠様と最后のお別れとなったのです。人間の関係と云うものは不思議なものです。おつきあいの長い短いは、深い浅いと必ずしも一致しません。この日、私は師の最晩年に教えを乞うた者として、師との御縁の深さを改めて、しみじみと感じました。年々歳々、衰退し薄れゆく記憶の数々の中でいつ迄も鮮明に残るであろう出来事でした。

七回忌のぞみ

おなつかしい師の面影を偲んで

合掌 竹本朝重

想うこと

竹本土佐恵

「もう、この年まで生きてきたから、死ぬことは怖くも何ともないけれど、死ぬとあなた達に会えなくなっちゃうのは寂しいわね」と静かに微笑えんでおっしゃられた師匠が、逝ってしまったから七回忌をむかえました。あちらでは大勢の方に大歓迎され、浄瑠璃三昧でしょうか。また、理想の男性、唐木政右衛門のような人に巡り逢い、楽しく輝いておいででしょうか、などと思ったりしています。

義太夫のことを考える度に、「文章をよく読み、登場人物の年齢好、性格、立場、その時の感情、心情をつかむことが大事。そうしていると、浄瑠璃が語れるようになる」という師匠のお話が蘇ります。しかし師匠の仰ったそのことを声に出して表現することは非常に難しく、また観客に伝えられるようになることも並大抵のことではありません。

「思うだけでも違うのよ」と仰った師匠の教えを守りつつ、勉強していきたいと思っています。



土佐廣師を囲んで

師土佐廣を想う一枚のメモ 竹本土佐子

泣き大 苦みん言
七世吉兵衛師の教
怒。哀。驚。憂。喜。七世吉兵衛師の教」と記されてあり

分に切って、自ら書いて下さったものです。常々、浄瑠璃は、「語れ、語るな、語るな語れ。うたえ、うたうな、うたうな、うたえ」と仰しゃって居り、大変に難しいことばでは、ありますが、メモのことばと共に、大切なものとなって居ります。子供の頃に入りました土佐尾師から、土佐子という名をいただき、後に二代目綾之助師の預り弟子となって居り、昭和六十一年六月に土佐廣師匠に入門となりました。土佐尾師の師匠は四代目土佐大夫、土佐廣師の師匠は六代目土佐大夫。年代的には隔たって居りますが、縁が繋がって居たように思われます。入門後、何度か入院なさることもありましたが、その度に『こうしては

いられません。早く帰って、皆の稽古をしなくては』と云い続けて居られました。平成四年七月に他界なされ、今年は七回忌となります。今でも『こうしては居られません。皆の稽古を……』とおっしゃって居られるようない気がいたします。



左=土佐子
右=土佐廣

二つの思い出 竹本綾一

寒い季節から待ち焦がれて迎える春。しかも桜といえは、人々は浮かれて開放的になる。そんな楽しい時期を、私はここ数年何とも悲しく過ごしている。七年前、師匠三代目竹本綾之助が、桜吹雪と共に天に舞い上がってしまったからです。師匠の義太夫人生の後半は、奇しくも同じ平成四年に亡くなられた竹本土佐廣師匠を崇拜し、常に気にかけておられました。

亡くなる四か月前の師走、折しも土佐廣師匠も病の身をお正月を迎える為、ご自宅に戻られておいででした。それを知った師匠は、何とかお見舞いに伺いたいと、私に連絡がありました。「お師匠さん、ご一緒させていただけます」と約束をして電話を切りました。しばらくして、又ベルが鳴り「やっぱりお腹がいたんで伺えないの」と切なそうな声。私はおこがましくも師匠のかわりと思い立ち、五反田へと急いだ。土佐廣師匠は、藤イスにチョコンと腰を降ろし、久し振りのご自宅にご満悦そうでした。早速、師匠の事を伝え、失礼ながらお手をさわらせていただいた。そのぬくもりがさめぬ様にと中野へ直行、師匠の手へとお渡しした。とても喜んで下さり「あなた御苦労さん。」と言って安心され、横になりました。私の最後のおつかいとなりました。

この事から数か月後（もうお師匠さんは治らないのか）鈍感な私は、まさかの事など考えも及ばなかったのですが、さすがにもしや

と思うようになってだいぶ経った頃、いつものように病室へと伺った。うつろな表情でしたが、私とわかってくれました。三味線を弾く手つきをされて「あなたやめ：：：」「あなたやめ：：：」と二回おっしゃいました。今になって、あの時どうして「ハイ」とか「わかりました」と答えられなかったのかしらと後悔して居ります。現在もなお、「やめてもいいのよ」か「やめちゃだめなのよ」なのか解明されぬまま、私も義太夫生活の後半にさしかかろうとしています。



協会参与の和田博氏が初代綾之助の錦絵を発見し、37回忌に菩提寺の厩橋榎寺に奉納した折のスナップ（撮影 和田博氏）

協会の役員の方が相ついで亡くなってしまいました。関係の深い人に追悼のことばを寄せて頂きました。

常任相談役

河野國声先生追悼の記

去る三月二十四日、河野國声先生が、百才の天寿を全うして身罷られた。先生は常々「本名の「義」は義太夫の義、俳名の「國声」は義太夫こそ國の声の意、号「十全」は書の周禮にあるところの完全をめざす意味であるが、それは仲々難しい」とおっしゃっておられた。「氣」の追求、「人こそ神である」の悟り、百才を迎えられての眠るが如き大往生、まさに「十全」を体現されたのである。

昭和四十四年、協会の法人化に際し、基本金四百万円(今の三千万位)が必要となった。仙廣副会長と二人で先生宅へ御相談に伺った。先生は「分った。私が筆がしらになれば、松岡語松・加藤聚楽・菊地秋月の皆さんも同じ額を出されるでしょう」と五十万円下さった。そしてその通りになり、忽ち二百万となり、その勢いで翌四十五年に法人化は達成された。更に五十五年頃、あと一步というところでM様の都合で実現はしなかったが、基本金一億円の財団法人「M・河野基金」を設け、その果実を義太夫振興に用う、という構想を推進して下さいました。また「仙廣賞」を設け援助して下さいたことは周知のことである。

スケールの大きい、悠揚とした先生が、斯

界の為にはかほどに心を砕かれた。只々感謝の念で一杯である。

一合掌一
竹本綾太夫

郡司先生を偲ぶ

「大層お世話に相成りました。郡司正勝が逝去いたしました。生前の遺言により、身内のみで密葬仕りました。生前のご好情厚く御礼申し上げます。」—先生ご愛用の手帳に、おそらく四月になってから書かれたものだそうです。義太夫協会顧問で早稲田大学名誉教授、郡司正勝先生は四月十五日、故郷の札幌にて逝去されました。かつて先生によって、一大ブームがおこった鶴屋南北が、自分の葬儀を演出したのを思い出させて、先生らしいご最期だったと思います。そういえば、今年の年賀状には「今年を以て賀状を欠礼させて頂きます」とありました。

去る五月二十九日、早稲田大学大隅講堂において「郡司正勝先生を偲ぶ会」が開かれました。講堂いっぱい、卒業生をはじめ、演劇、学会、舞踊、舞踏、邦楽：各界の方々が集まって、先生のビデオを拝見し、献花しました。ビデオの中で先生は、「日本は神様が下界へおりてきて下さるんだ」と熱く語り、松枝岐かぶきを現地で感じ、「勸進帳」の義経を演じ、などしていらっしやいます。実は先生は、義太夫もなさったことがあります。

先生の学問は、机上だけのものではなく、常に日本人の根本的な発想をご自分の肌で感

じた上で芸能を探っておられました。そして、多くの南北作品の補綴・演出や劇作で、数々のヒット作を世に残されました。

戒名は「一心院勸戯日生居士」。

謹んでご冥福をお祈りいたします。(T)

顧問 石井英子さんを悼む

「本牧亭のおかみさん」こと石井英子さんは、我が国唯一の講談定席を守った方である。「鈴本」の大旦那鈴木孝一郎さんの次女であったおかみさんが、昭和二十三年から本牧亭を委され、平成元年迄の四十年余、大変な苦勞を重ねられた。講談界の大恩人であるが、我が女義界に於いても忘れることの出来ない方である。昭和二十六年の一月より、女義にも貸席として開放され、昭和二十八年頃より毎月一日から四日迄の夜(昼は講談定席)となり、四十七年の改築迄の二十年余、微々たる席料しか払えぬ女義をずっと支えて下さった。更に四十五年の協会法人化の折、事務室の一角を事務所として無償で貸して下さいたのである。改築後、二日間の興行となったが、平成元年の閉鎖迄、規定の席料を割引した上、見台や行李等の荷物を床下に置いてもらったが、これも無償であった。おかみさんは、余計なことは何にも言わぬ方で、どんな頼みごとも「ハイいゝですよ。どうぞ」とそれで決まりであった。(私事だが、一度だけのお断わりは、鈴木関係のある女性との交際許可を得んとしたところ「あなたには似あいません。



故竹本春華

「おやめなさい」であった。」

女義の中堅以上の人は、皆本牧亭で育ち、芸を磨いた。陰で支えてくれたおかみさん、ありがとうございました。感謝と共に御冥福を祈ります。
竹本綾太夫

竹本春華師逝去

女流義太夫の第一人者だった春華師が四月亡くなりました。(享年九十一歳)

十二年前愛弟子の華昇が初舞台の際、元気に「酒屋」を語ったのが最後の舞台となりました。「娘義太夫」という名に最もふさわしく、艶やかさと美声ですべての観客を陶醉させました。まさに大輪の名花が散った感じが致します。心からご冥福をお祈り申し上げます。

〈春華先生の思い出〉

竹本華昇

魅力的な目でした。

「タケイチ ミツヒデー」と語る時は、大きく見開いたまなこに、黒目が点の、三白眼になり、「私は里と申して」と語れば、可憐な中に、哀れな露を含み、「出かしちゃった、く、く、出かしちゃったよな」と声をふりしければ、気丈な瞳が、次第に慈愛の涙に曇り、「尤じゃ、誤った」とおさんにわびる時は、ほうけてうつろな、頼りない目となっているのでした。国貞の浮世絵そのものの、面長にすつと切れ長の大きな目、くつきりと一の字を筆で引いた様な眉の線、大阪北堀江の、大きな肉料理屋のとうさんだった頃、松竹の社長さんに、女優にならないかと請われたことが自慢の、春華先生の語りはその目の表情にも増して、どれ程魅力的だったことでしょうか。文楽とは違い、お人形さんがなくても、お客様の心をわしづかみにして離さない、先生の浄瑠璃は、持って生まれした艶のある声と共に、千変万化の豊かな表現力とで、きらきらと輝いていました。その先生の語る姿を目の前にして、十三年間もお稽古させて頂いたのは、本当にしあわせでした。大輪のあでやかなお花が大好きで、十勝のおはぎと、モンブランのプリンが大好物だった。厳しくて優しく、そしてちょっぴりわがままな甘えん坊だった春華先生、どうぞごゆっくりお休み下さい。

一義会報告

一義会より、Wカセットテープレコーダー・夏むきの床敷き、すだれクーラーと冷蔵庫を揃えていただきました。

事務局より

ご不要のものがありましたら、是非お譲りください。

- 一、レーザープリンター
- 二、パソコン（ペンティアムCPU M MX以上）
- 三、事務機器（書庫・キャビネット等）



お達者ですか

Part 2

竹本素八師の巻

掃き清められている師匠宅への道、ほうきを持って立っている素八師匠を発見。「お宅へは何度かお訪ねしていますので知っております」と申し上げたにもかかわらず、もしもわからなくなったらかわいそうだからと、ずっと前からそこに居て下さった様子。申し訳ないやら有難いやらで…。

「サア／＼早く入って／＼」「ハイ、デハ」師匠のお部屋の床の間に備前焼の獅子が置いてあります。

素 「これは私の宝物。看板上げの時に、この置物にお客様が『獅子奮迅の腕ぞみがかん』という唄をつけて下さったものでね、空襲のときも箱入れて穴掘って埋めといたのヨ。だから無事だったの」

実家は岡山。母親が芸好きで子供の頃には踊りを習っていました。ある時、お祭りの芝居小屋で友達が浄瑠璃を語っているのを聞いてうらやましくて、自分もやりたくなって浄瑠璃の師匠のもとに連れて行って貰ったところ、居合わせていた方が竹本素女師匠と知り合いました。そこから、本格的に習うことを勧められたそうです。

十四才で単身素女師匠入門ですね。

素 そう、七年の年季と一年間のお礼奉公を

がまんして修業すれば一人前の義太夫語りになってね、田舎に帰ってきてもこの土地で稽古すれば食べていける、そう言われて自分でもそう考えて出かけましたよ。一流の芸人になりたいなんて、大それたことは全く考えてなかったですよ。すぐに素八と名前をつけていたで、一度も変えずに今に至っています。「八」は広がるから縁起がいいからって。でも本当はね、パーだからそうされたんですよ(笑)。

素女師匠の弟子は大勢いましたね。でも今は私たった一人。戦争ということがあったし、他には結婚してやめたり、芸にゆきづまったりでね、皆やめていったの。戦争がひどくなってきたから、師匠は皆それぞれに家に帰したりしたんだけど、私の場合、母から『こんな時帰ってきても仕方がない、師匠と一緒に居なさい！師匠は一人なんだからあんたがついていて、死ぬときは一緒に死んだらええ』と言われてね、残っていたの。



戦後は爆弾の心配がなくなったからね、岡山へ帰っていたの。そしたら間もなく師匠がみえてね、東京へ戻って来いとは言わなかったけどもね、来てほしいんだなあと感じるだったので、また師匠のところへ戻ったんですよ。

その後、代稽古で行っていたところのご紹介で、今一緒にいる息子の父親になる人のお世話になりました。その頃はまだ、奥さんになったら芸をやめるといふ風でしたから、それはいやだったしね。いろ／＼大変な事も多かったけど、お蔭様で孫も三人子供を生んでおいてよかったですよ。

ところで土佐廣師匠の七回忌ですね。土佐廣師匠にはいつごろから稽古に行かれたのですか？

素 エー、何年だったかは覚えてないけど。素女師匠が亡くなられてしばらくあとに「すしや」の権太をやったとき、故仙廣さん(前協会副会長)に呼ばれてね、『あんたの権太はなっていないじゃないか。なんでどこにも稽古に行かないのか。土佐廣さんがいらっしやるのに、どうして行かないのか』って言われてね。私は素女師匠が亡くなられて三年過ぎたら伺いたいと思っていたところだったからね、そのように言ってね、それで伺うことになったんです。だから三十年くらい前でしょうね。(今年素女師匠三十三回忌だったそうです。)

土佐廣師匠には世話物を教えていただいた

てね、以前は時代物ばかりやってきたから、音を遣うなんて知らなかったんですよ。音に、甲に、鼻を使うことを教えていただけで、情を語ることも。ほんとに有難いことだったと思ってますよ。今、浄瑠璃の工夫ができるようになったのも、あの師匠のお蔭です。

素 現在の体調、状況を。

他に、東宝ゆかた会の方が月に二回七名みえていて、国立の養成課へもたまには行きますからね、丸々体があいているのは月に六日だけ。でもその日はほとんど近所のお医者に行きますから、家でぼーっとしていることはないんです。二、三年前に腰を痛め、それがようやく直ったなと思ったら去年の夏にまた痛くなつてね。でも私は忠実にお医者に行っているから大丈夫だと思つてます。少し運動もしたほうがいいですよ、こないだ内科の先生が私の体診で、なんて大きな心臓なんだってびっくりしましたよ。



これからの抱負は？

素 ホウフ？ホウフって何？今日一日生かして下さいって、毎朝拜んでるのよ。ねえ、

有難いよねえ、こんなに元気でね、浄瑠璃語らして貰えるんだものねえ。有難いと思つているのよ。それで満足なのよ、ねえ。私はこれからこういうものをやりたいとか何も思つてないけどもね、やっぱり時代物が自分らしいし、だから語れる限りは語り続けてゆきたいですよ。長年「腹切太夫」と言われてるから、それでいいと思うのよ。帰りに玄関先まで出て下さって、師匠独特の、おいで／＼をするようなバイ／＼で、「じゃね、気をつけてね。さよならね」と、ずっと見送って下さいました。どうかいつまでもお元気で。

お知らせ

第三回長月会ー竹本越道一門勉強会ー
平成十年9月25日(金) 六時半開演
上野広小路亭 *二千円
第五回竹本越孝の会
平成十年12月8日(火) 六時半開演
お江戸日本橋亭 *二千円

素之助さん、

文楽なにわ賞で最優秀賞に！

新作文楽の脚本に贈られる第七回「文楽なにわ賞」の最優秀賞が藤田和嘉子さん(竹本素之助)の「花降り峠ー御伽草子『木幡狐』よりー」に決まりました。大阪に居を移してからたくましいお母さんとなって、太夫としての舞台姿やあの声も時と共に遠くなつていった素之助さんが、別の才能で花を咲かせました。文楽の新作脚本を公募するこの賞に、挑戦三回目(前二回は佳作)にして最優秀賞受賞。これは何と六年ぶり、第一回以来の快挙です。脚本を読ませてもらった時、さすがに美大出身だけあって、舞台が目には浮かぶような「絵になる」という印象でした。文楽で上演されるのをお待ち下さい。最近是人形芝居の演出も手がけるなど、多才ぶりも發揮しています。



藤田和嘉子
(竹本素之助)

義太夫教室が開講されて五十年を迎えました。その間数えきれない程の愛好者を育て、そして今この世界で奮闘している沢山のプロも産み出してきました。当時最も若かった第一回目の卒業生でもあり、創立にも携わってこられた竹本弥乃太夫常務理事に、その頃のことを振り返って頂きました。

(弥乃太夫理事は、義太夫協会が法人化された昭和四十五年からずっと講師を続けて下さっております。)

義太夫教室の誕生

竹本弥乃太夫

以前この会報に、教室初期関係の記事を投稿したので、成可く重複を避けようと思う。教室も年々盛んになっているので、初期の教室の状況を再び説明することも、決して無意味ではない、と敢えて筆を執った。

昭和二十三年と言えば、東京はまだ戦争の傷痕が残っていた。現在のように歌舞伎の興行は出来ず、劇場は東劇が焼け残ったが、進駐軍の管轄下におかれていて、芝居が出来るような状態ではなかった。また歌舞伎座は空襲のための残骸が目覆うばかり、瓦礫と化して放棄されていた。

そしてその年の六月十五日、義太夫教室が誕生したのである。……その日は暑い日だった、三原橋の下は川とは言えない、全くどぶのようで、暑さに蒸れた異臭が橋の上まで漂ってくる。三原橋角の警察はそのまま現在も存続する。そのとなりがカルピスの会社、そこを北へ三百米入ったところが、再建され

た朝日クラブという日本間の貸席で、義太夫教室第一期開講式の会場に当てられていた。

川沿いなので臭くて戸は開けられない、当時とはいえ、冷房設備は、扇風機とでもない、むんむんとした二階の座席であった。

今考えれば、義太夫復興に情熱を燃やしていた貴い篤志家たちの姿があったことは、感謝せねばならない。その設立発起人代表が、坂本あるを氏、この方は後に豊竹湊太夫となる。そもそも私と知り合ったのが、神田神保町の一心亭という貸席である。戦後、いち早く復興した素人義太夫の会の、発会ピラを、神田で見たのが縁となったのである。後で分かったが、そこに合わせた素人義太夫の連中は、東都五十義会という義太夫会の、惣々たる旦那衆であった。

坂本氏はにこにこ私のお好きですか? 荒れ果てて復興もできないこの広い東京に、義太

夫の好きな若者がいる、ということに何か意を強くしたらしい、そこで義太夫教室の設立を思い立たれたのである。

ある日、私の寄宿先に色の青白い青年が、義太夫教室開講の案内を持って訪ねて来た。川口子太郎氏である。やがて、歌舞伎が解禁され、初の芝翫と勘三郎のコンビが実現し、東劇で「壺坂靈験記」を上演しその演出を担当したのが彼である。近松半二に傾倒し、芸名を杉酒屋から採って「子太郎」とした。関西で武智鉄二、関東では鬼才の川口と並び称された人であったが、不幸にして頭脳明晰で若死した……

さて、そこで当日の応募者は、私を含めて五人いた、義太夫が好きだなんて、まあ珍しい人種位に思われたらしく、生徒としては、丁重に取り扱ってくれた。その生徒の一人、久保君は弁護士のお子で、別に義太夫には興味は示さない、法廷で大きな声が出せるようになりたいと言った。鷺尾君は後に国立劇場に勤め、惜しくも三年前他界した。

さて開講した義太夫教室の授業は、川口子太郎氏の家の前の、これも義太夫旦那衆の一人飯泉さんの製本屋のひと間を借りて行った。週三日、夕方六時から九時、講義、語り二科目で月謝は、三百円でほぼ一年間を通した。二年目の二期になると、一期生はそのまま居残って二期の授業を受けた。生徒数が少ないので出来たのである。

教場のそこは、京橋の川の下を流れる竹河岸に続く大根河岸で、京橋榎町と言った。夜

になると俄に響く太棹の音に、付近の住民たちは驚いた。まずマスコミが嗅ぎ付け話題になった。読売新聞、NHKとまず取材に来た。近藤日出造がスケッチした稽古風景の絵が、翌日の新聞に掲載された。NHKの録音を聞いて応募して来たひとが数人いた、中でも佐佐木明朗氏と太田正文氏とは今も健在で、交誼を得ている。

その当時竹本土佐廣師は五十歳を少し出たくらいで、臨時の講師として《酒屋》を、鐘に散り行くから、さわりまでを弾き語りで聞かせてくれた。その酒屋は後世いつまでも耳について離れない。私は母と祖母が大の芝居と義太夫好きで育ったので、まね事で義太夫を覚えていたが、イツ間と離れていない目の当たりで、それも本格の芸に触れた喜びと感激は、なかなか忘れるものではなかった。正規の先生は鶴沢三生師が時代物で、《絵本太功記十段目》残る蕾の枕から、操のくどきまで。同じく豊沢猿幸師が世話物で《新版歌祭文、野崎村》あとに娘は、からさわりまで、講義の先生は男性の、野沢吉二郎師で《曲節の分解》：(後述) 以上のお三方である。

さて私として個人的に、三生師は義太夫の母親的存在で、本当に可愛がってくれた。三味線の手ほどき、朱の書き方、生み字の細かい節回し、なども懇切に教えてくれた。また講義の野沢吉二郎師は、義太夫の曲節の分解という、今までにない分野で、三味線の演奏を加えながら話をしてくださる。今なら、す

ぐ録音という所だが、まだまだそんな機器は、一般には普及されていない、だから精一杯、私なりにメモをとることしか出来ない。後年教室で私が、音調基本を受け持つ時、そのときの自分の感動と感激を、少なくとも今の若い人達にも味わってもらえればと頑張っているもの、中々力不足は免れない。私が音調基本を続ける限りは、師の薫陶を無駄にならないよう頑張る。

では吉二郎師はどういう講義の入り方をしたか、一例を挙げてみる。いきなり《声曲類纂》の話から始まる。当時そのような話のできる方は、義太夫の先生方には、失礼ながらあまりにも見当たらない。声曲の節章句早覚えには、《タタキというは、しめやかに》と書かれてあり、このように弾いて語るのだ、と実演する。坊さんがチンチン鉦を鳴らして門に立つ、竹本義太夫はその音を聞いて、自分の節に採り入れたんだよ、それから、冷泉節というのがある。これは竹本義太夫が、播磨太夫の所を飛び出して弟子入りした、次の師匠の宇治嘉太夫の得意としていた節なんだ、でもそれは諧謔的な節として用いられていたが、竹本義太夫は、悲哀に満ちた遊女たちの騒ぎ戯れる有り様にこの曲を使ったんだ。それは大変な評判になり、新進気鋭の義太夫の人気を高め、逆に嘉太夫は自分の得意とする節をかき回されたため、竹本義太夫を破門した、以来嘉太夫の人氣は衰微していった。それから数えて足掛け五十年、丁度節目の

年になる。毎年一期づつ年を追うと今期が五十一期の義太夫教室開講となるので、既に半世紀を経た歴史的にも由緒の高い教室と言えよう。教室の皆さんには、これからも、伝承芸能の灯を消さぬように、義太夫に是非とも一層の関心を示して貰いたいものと努力を期待している。

平成十年六月記



協会の動き

1988年7月より
1989年1月まで

協成新人奨励賞受賞

〔平成九年度〕

1月8日 普及部会 於さらしなの里

1月9日 芸術文化振興基金要望書提出

1月12日 常務・保存会理事會

1日22日 女流義太夫演奏会「猪名川内」他 於サロン・ド・サンク

2月8日 「第三回駒之助の会」 於国立演芸場

2月12日 国立劇場十一年度使用申込書提出 於紀尾井小ホール

2月20日 常務理事會 於松竹会館會議室

2月22日 女流義太夫演奏会「伝承者研修発表会」 於国立演芸場

2月28日 義太夫教室OB会(第50期卒業発表会) 於東京証券会館ホール

3月1日 上野広小路亭「じよぎ」公演 於上野広小路亭(二日間)

3月7日 東京都邦楽演奏会 於朝日生命ホール

3月9日 普及部会 於さらしなの里

9日 義太夫教室第50期閉講式 於演舞場スペースアルファ

3月13日 NHK助成金申請 於サロン・ド・サンク

3月22日 邦楽會議 於サロン・ド・サンク

協成新人奨励賞受賞

3月22日 公演部会

〔平成十年度〕

4月1日 東京都補助金実績報告提出

4月3日 芸術文化振興基金実績報告書提出

4月12日 一日体験教室 語りコース 於演舞場スペースアルファ

4月14日 保存会九年度国庫補助金・東京都補助金確定通知

4月16日 芸術文化振興基金九年度助成確定通知

4月22日 女流義太夫演奏会「寺子屋」他 於国立演芸場

4月22日 車人形出演 於小杉会館

4月23日 芸術文化振興基金十年度内定

4月26日 一日体験教室 三味線コース 於演舞場スペースアルファ

4月28日 車人形出演 於立川中学校

4月30日 車人形出演 於八王子第二中学校

5月1日 車人形出演 於八王子第四中学校

5月22日 女流義太夫演奏会(竹本越孝豊澤)

仙廣賞受賞) 於国立演芸場

第51期義太夫教室初級開講

5月25日 「もっとじよるりが知りたくて

5月30日 そんなアホな!」 於カフエテアトル ふたつの部屋

6月5日 「ひこばえ4」 於お江戸日本橋亭(二日間)

6月6日 公演部会 於一義会稽古場

6月7日 芸団協總會 於大手町東京會館

6月15日 選挙管理委員會

6月17日 編集部会 於松竹会館會議室

6月18日 正會員審査 於協会事務局

6月23日 於国立劇場第二演芸研修室

6月27日 女流義太夫演奏会「酒屋」他 於国立演芸場

6月27日 理事會 於演舞場スペースアルファ

6月30日 邦楽振興基金申請書提出

7月1日 經理部会 於松竹会館會議室

7月1日 上野広小路亭「じよぎ」公演

7月2日 於上野広小路亭(二日間)

7月3日 理事會 於松竹会館會議室

7月6日 広報担当者のつどい

7月7日 編集部会 於芸団協會議室

7月14日 芸術文化振興基金申請書提出

7月14日 芸団協成申請書提出

7月15日 編集部会 於協会事務局

一日体験教室

4月12日(日) 「語り」 53名参加、4月26日(日) 「三味線」 36名参加、一日体験教室が開催されました。参加者に感想を聞いてみました。

「語り」

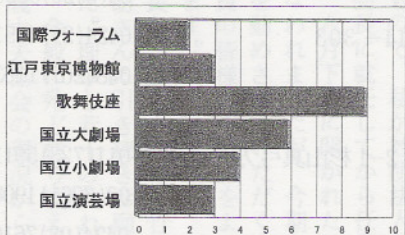
○なかなか伝統芸能を体験する機会がないので、今回みたいに手軽に体験できるのは非常によかったです。

- たくさんの方が来ているのでびっくりしました。私は歌舞伎がきっかけなのですが、他の方は何がきっかけなのでしょう。
- 一人芝居をしているようで楽しかった。
- 声が出しにくかった。腹から思ってもいきなり出来ないで喉が痛くなりました。
- 普段は自分の声の動きにこんなに気を遣うことがないので不思議な感じでした。

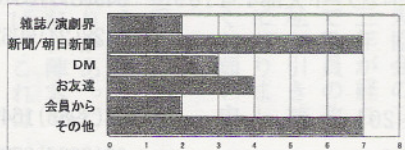
1日体験教室(語り)アンケート集計結果

4月12日(日)の1日体験教室(語り)は、参加者53名、アンケート回答51名集計結果は、下記と通りとなります。

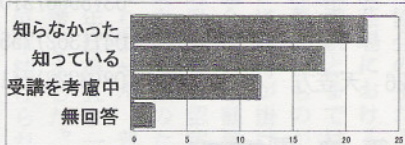
1.チラシ入手先



2.宣伝等



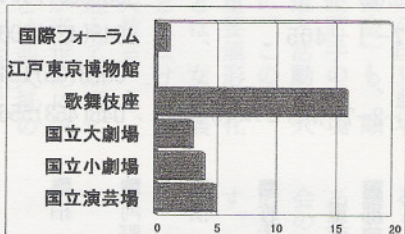
3.義太夫教室について(複数回答)



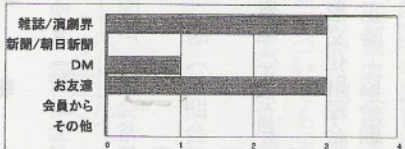
1日体験教室(三味線)アンケート集計結果

4月26日(日)の1日体験教室(語り)は、参加者36名、アンケート回答35名集計結果は、下記と通りとなります。

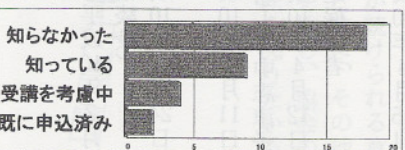
1.チラシ入手先



2.宣伝等



3.義太夫教室について(複数回答)



- 声の出し方、節まわしが難しい。もう少し導入部分があればいいのでは。
- 西洋音楽の楽譜にはない音やマは、自分に合うなと感じています。
- 楽譜のような物がないので、次へ進んだ途端に前を忘れてしまいました。
- 男性が少ないが男のクラスがあればよいと思います。

「三味線」

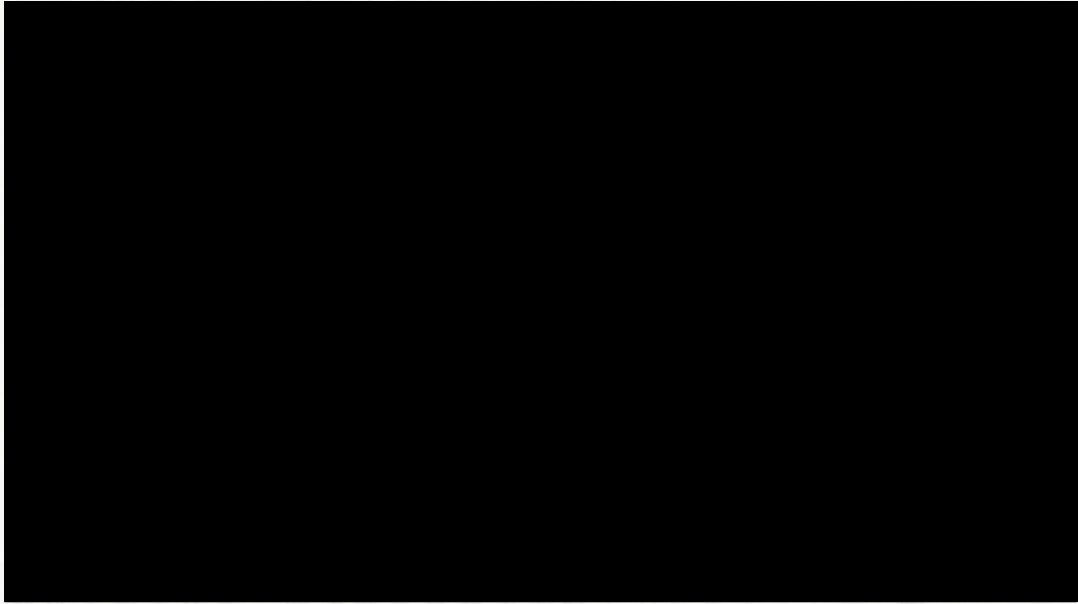
- 糸のはねかえりが想像以上に強くびっくりしました。聴くと実際やってみるのとはあまりにも違うと感じました。
- 今後の舞台の楽しみ方も変わると思っています。
- 三味線の数を考慮に入れて受講者の数をしぼってほしかった。
- 今回の教室の流れ、人を見る機会もあり、三味線にもたくさん触れられてとてもよかったです。

- 一つ一つのことを丁寧にゆっくり教えて下さったので、とてもわかりやすかったです。
- 2本一緒に弾くのがよくできませんでした。構え方や、手の指の位置だけとか取り出して、教えて頂ければもっとよかったです。
- 最後に一人ずつ弾く時まで、自分の弾いている音を確認する事ができませんでした。
- 講師の方に、何か一曲通して弾いて聴かせてほしかったです。
- 太夫との実演があってもよいのでは。



新入会員御紹介(五十音順・敬称略)

[]内は義太夫教室卒業期



住所(住居表示)等変更



訃報

■ 柏 ゆき(賛助会員)

平成10年2月逝去

■ 河野 国声(協会常任相談役)

平成10年3月24日逝去

■ 橘 昭(賛助会員)

平成10年4月11日逝去

■ 竹本 春華(正会員 本名一寺中志津子)

平成10年4月12日逝去

重要無形文化財総合指定保持者

■ 郡司 正勝(協会顧問)

平成10年4月15日逝去

■ 石井 英子(協会顧問)

平成10年6月7日逝去

〔編集後記〕

○8・9頁の写真、誰だかお分かりですか？協会某役員の反応。「まあまあ…そういえば面影が…」「アンタ、これ他の人のを持ってきたんと違うの？」(答え…素八師)

○編集部も今回でお役御免。次号よりは新編集長のもとで紙面刷新…といきますかどうか…。それはともかく、K編集長最後の力作、何と14頁もの超大作です！

○サッカーW杯にテニス、深夜のTV観戦がたたって左眼に「ものもらい」が…。その顔を見て「両眼とも?!」と言ったKさん、覚えていて下さいね！ (K2)